

地域社会に宿る共育力 — 何も教えないことから始まる —

辰己佳寿子¹⁾，木佐 方徳²⁾

1. はじめに — 若者たちを育ててきた地域社会システム —

地域社会ではお祭りや地域の行事などが行われ、当然、若い世代も参加していた。そこでは、世代間交流が生まれ、若者たちは社会のルールや決まり事を学び、その経験を経て実社会へ巣立って行った。しかし、特に高度経済成長期においては、若者たちは地域を離れ、都会の競争社会の中に身を置く傾向が強くなった。学校では教科教育に重点が置かれ、暗黙のルールや他者との接し方、立ち振る舞いなどは誰も教えてくれないことが多い。景気が良かった時代には、会社がそれを教える余力があったが、景気が停滞している現在、全体的な傾向として、会社にはそんな余裕はなく、企業は常に即戦力を求め、失敗の許されない社会となりつつある。

そんな状況下、ふと農山漁村へと目を向けた時、祭りや行事を通して人を育ててきた地域社会のシステムの重要性に改めて気付かされる。地域社会には、生業や冠婚葬祭等を通して社会関係が集積し、一定の連帯ないし相互扶助の意識や帰属意識が働いている。網の目のように人々の関係性が時間軸と空間軸で織りなされていて、そこで若者たちが育ち、彼らもまた誰かを育て、一方で、年配の方々も若者たちから学ぶという、共に学び成長し共に育み合う“共育”力が宿っている。その“共育”の場で風土や地域の文化が育まれてきた。そこにはカリキュラムもマニュアルもない。鳥根県出雲市（旧平田市）出身の映画監督の錦織良成氏（以降「錦織監督」）が「なんにも教えないところから始まる」と述べているように、教えるのではなく主体的に学び合うことが当たり前のよ

¹⁾ 福岡大学経済学部教授

²⁾ 福岡大学非常勤講師、株式会社 TSK エンタープライズ映像企画部担当部長

うに引き継がれている。

ただし、このような風土をもつ地域社会が少なくなっていることも事実である。人口減少、高齢化により祭りや行事を取りやめたところも少なくはない。山口県のO集落では、神輿を担ぐ若者たちが減少したため軽トラックで神輿をお旅所に移動させている。S集落では、神楽の舞手や囃子を担う人が少なくなり、太鼓と舞手ひとりで神楽の奉納を行っている（辰己2016）。農山漁村の風土の存続が危機的な状況にあるだけでなく、地域社会の存続自体が危ぶまれている。2014年、日本創成会議が2040年までに896の自治体が消滅すると予測したことは周知のとおりである（増田編2014）。

このような課題を踏まえてさまざまな取組がなされている。2001年に財団法人都市農山漁村交流活性化機構が発足、2003年には都市と農山漁村の共生・対流推進会議が発足し、そのほか地方自治体やNPO団体などが中心となって都市と農山漁村の交流促進を図っている。2008年には、総務省が集落支援員制度や地域おこし協力隊制度を開始し、地域外（特に都市部）の若い人材を積極的に誘致し、その定住・定着を図るための具体的な事業が導入された。地域おこし協力隊は、2009年の創設当初は89名であったが、2017年には2,625名の約30倍に増加し、その6割が任期終了後も同じ地域に定住をしている^[1]。

しかし、目白押しの交流事業のイベントに疲れがみられたり、狙いとしてきた交流・滞在から定住へのつながりが思惑通りに進まなかったり、新規定住者受入後のその参入者と地域社会との関係構築が試行錯誤のまま企画そのものがいまだに成熟期を迎えていないなど、解決しなければならない課題もみられる。たとえば、地域おこし協力隊の派遣においては、数多くの成功例はみられるものの、若者と地域との間にギャップが生じることもある。それらを埋めるために、島根県中山間地域研究センターは、『地域おこし協力隊の心得集^[2]』『地域おこし協力隊導入のチェックポイント（2015）^[3]』などを出している。

一方で、若者たちはどうだろうか。ジャーゴンを使う閉鎖的な社会に留まり、そこに安心感を求める傾向があるといわれている。NHK放送文化研究所が2011年に行った「生活と社会に関する世論調査」では、20歳代は、他の年層より「他人に迷惑をかけなければ何をしようと個人の自由だ」と考える個人主義的な人が際立って多いことが報告されている（高橋・村田2011）。また、長

山（2014）は、「ゆとり世代の『空気を読む』範囲は極めて狭く、自分が属している同世代のグループのそれは読んでも、顧客や上司が醸し出している『空気』には適応できていないらしい。あるいは、適応する気がない」と指摘する。すなわち、ある社会において何らかの役割を担う社会的な存在としての振る舞いよりも、その場の空気に合わせて存在感を最小限にとどめる「省エネモード」で限られた他者とのかかわる傾向が強いのである。

つまり、地域社会は若者たちを求めているが、多くの若者たちには地域社会の網の目が張った社会関係に適応しようとする意識が根付いていないのかもしれない。または、地域社会は、若者たちを受け入れることによって生じる変化に対応する準備、それによって、これまで集積した社会関係をも組み換えることへの覚悟ができていないのかもしれない。若者たちの中には、空気を読んで場に合わせて行くことに不安に感じていたり、何かをしたいと思っていたりするが、どう行動を起こしてよいかわからない人々がいるのかもしれない。どこにエントリーポイント、もしくは受け皿があるのかがわからないまま日常を過ごしているのかもしれない。

このような地域社会と若者たちの乖離を想定して、本稿では、連綿と受け継がれてきた地域社会システムの再構築を考える場合、若者たちをどのように地域社会に呼び込むことができるのか、若者たちと地域社会をつなぐことはできないだろうか、どのような手段であればより良いつなぎをもたらすことが可能であろうかという問題意識をもつに至った。

これらの課題を検討するための事例として、鳥根県で2003年から草の根レベルで地道に行われてきた「しまね映画塾」に着目した。この塾は、鳥根県のある地域を舞台に地域住民と参加者が一体となって映画を制作する取組である。この事例をとりあげた理由は、互いが育みあう“共育”的な学びの場となっており、参加者や地域の人々の当該地域への関心の高まりや地元愛の醸成が行われるなどの効果もみられ、彼らが、多世代と出逢い、地域と出逢い、閉鎖された個人が開かれていく過程を明確に捉えることができるからである。一過性のイベントとは異なり、“共育”が文化として根付いていることに特徴がある。

さらに、「しまね映画塾」が注目すべき活動であるならば、他地域や他の条件下で、この方法論を応用させることが可能なのか、という課題が浮上してく

る。そこで、この方法を模倣して始まった福岡大学のワークショップ型の授業をとりあげてみたい。学生が団結して地域の課題をテーマにしたドキュメンタリー映像を制作する取組である。この授業が、学生たちが地域に対峙し、参加者のチーム力を高め、互いに育みあう“共育”の場となり得るのか否か、現状と課題を検討し、「しまね映画塾」の応用可能性について言及する。

2. 「しまね映画塾」開催の経緯と概要

2.1 最先端の島根県

島根県は、中国地方の北部にあり、東は鳥取県に接して近畿・京阪神地方に通じ、西は山口県を挟んで九州地方に、南は中国山地を隔てて広島県に接し、北は日本海に臨んでいる。人口は712,292人、高齢化率は29.1%（2011年10月1日現在）であり、47都道府県中の人口は第46位、高齢化率は第2位となっている。島根県は、首都の東京都と比べると、面積は3倍であるにもかかわらず、人口は18分の1、島根県の国内総生産は40分の1である。西中国山地の最奥部に位置する島根県益田市匹見町は「過疎」という言葉が生まれた地とも呼ばれるほど、人口が著しく減少した地域でもある。ある意味、過疎化・少子高齢化社会の最先端を歩んでいるともいえ、小宮山（2007）がいうところの「課題先進地域」であり、もはや日本だけでなくアジアのそれとして位置づけられる。

島根県の溝口善兵衛知事は、島根県は、全国平均に対して、通勤時間が短く、住居が広く、自然が豊かで、高齢者には元気な方々が多いという特徴をあげている。さらに、ボランティア参加者の多さは全国2位で、犯罪発生率は低く、犯罪検挙率が高いのは、これは、温かい人間関係や地域社会が残っていることが理由であると指摘している。現代の県民気質 全国県民意識調査（NHK放送文化研究所1997）では、「県人という気持ちをもつ」「この土地の人々の人情が好き」「地元の行事や祭りには積極的に参加したいと思う」「この土地のことばが好き」「この土地のことばを残していきたい」「隣近所との付き合いが多い」という項目において全国平均よりも高いことが示されている^[4]。

このような特徴をもつ島根県には、出雲大社、世界遺産の石見銀山、城下町松江、小京都津和野、雄大な自然の隠岐など、自然および文化的・社会的な資源が数多くある。錦織監督は、この島根県の資源は、日本だけでなく、アジア

および世界にとっても希少価値をもつことから、「ローカルは最先端」を掲げ、島根県を舞台にした映画を通して「日本の心」および「日本の独自の文化」を発信し続けている。

錦織監督は、2002年には、島根県出雲市（旧平田市）の小さな塩津小学校と沖合に行く大きなフェリーとの心温まる交流の実話をもとに、夢を叶えようとする素直な心と優しい気持ちの可能性を描いた「白い船」、2008年には、島根県雲南市を舞台に、神話と一体になった自然の豊かさと人々のさりげない生活を描いた「うん、何?」、2010年には、島根県松江市と出雲市を結ぶ一畑電鉄を舞台に、家族の絆、人と人との繋がり、思いやり、日本の心を描いた「RAILWAYS -49歳で電車の運転士になった男の物語」というオリジナル作品を制作した。

2013年には、島根県隠岐諸島を舞台に、家族の絆、思いやり、人々の繋がりや日本の心を描いた「渾身」を制作し、モントリオール世界映画祭の正式招待作品に選ばれた。この映画に劇団 EXILE の青柳翔氏が出演したことがきっかけで、EXILE の HIRO 氏が島根県に興味をもち、錦織監督と世界に誇る“日本”を発信する映画を一緒に作ろうというプロジェクトが動き出した。

2014年、錦織監督は、島根県に古代から続く唯一無二の製鉄技法である“たたら製鉄”を題材にした時代劇「たたら侍」（2017年5月20日公開予定）の撮影を島根県雲南市で開始した。この作品のエグゼクティブプロデューサーを務めた HIRO 氏は「EXILE と島根と時代劇、一見かけ離れているように見えますが、僕たちの活動の根底には、日本の誇りに挑戦したいという思いがある。そこは共通しています。僕にとって、本物がある島根はすごく刺激的です」と述べている^[5]。2016年9月、「たたら侍」は第40回モントリオール世界映画祭ワールド・コンペティション部門にて最優秀芸術賞を獲得するという快挙を達成した。映画を通して、日本のローカルに宿る精神や文化が世界の人々の心にも響いているのである。

2.2 「しまね映画塾」開催の経緯

島根県は、日本文化の発祥の地といってよいほど文化的な資源は多いものの、常設の映画館は2館のみである。島根で「大きなスクリーンで映画をみせ

たい」「みたい」という思いから1992年から「しまね映画祭」が始まった。第1回から企画委員長として会の発足に携わっている杉谷宥男さん（以降「杉谷委員長」）は、「当時既にあった鳥根県民会館の『名画劇場』が母体で、それを県内各地に波及させようと言うか、各地の有志が『やろう』と手を挙げてくださったのが『映画祭』に発展しました」と当時のことを振り返る^[6]。

しまね映画祭の特徴は、“鳥根方式”とも呼ばれ、数ある映画祭の中でも開催地を固定せず、県内各地の公共ホール等で開催していて、各地の人々が運営にも主体的に関わる地域密着型の映画祭になっていることである。映像作品に触れる手段はいくつかあるが、「なぜ、映画なのか」という問いに対して、杉谷委員長は以下のように答えている。

私にとって映画とは「自分を映す鏡」です。自分の出来ない体験など、自分が隠している心の奥底などをうまく物語りにしてくれている。現在、松江テルサ^[7]でも昔の映画を上映してます。そこに来るのは六十代、七十代の方達。その人達がポロポロ涙をこぼしながら昔の映画を見ている。感動もあります。当時の自分達と照らし合わせ、自分達の青春時代を映し出しているんです。今の若い人達、子供達に将来同じことができるかと言えば疑問ですね。

限られた空間の中で、“知らない人”とも一つの作品を共有し、そこから発せられるものを同時に受け止める。これは、テレビやビデオ・DVDでは決して出来ない。これが映画なのです。「しまね映画祭」が、映画を見る“動機付け”できればいいと思います。千人の来場者の内、一人でも十人でも多くの人が“映画”という文化を感じ取っていただけたらと思っています。

杉谷委員長は、鳥根県松江市の出身であるが、大学卒業後、高度成長期に東京の出版業界に入った。その後、鳥根県にUターン。山陰中央新報社を経て、松江テルサに勤務した。鳥根を出て鳥根を客観的に見た経験をもつがゆえに鳥根に対する想いは大きい。「しまね映画祭」は、【表1】に示すように鳥根県の欠かせない文化行事として定着している。はじめは8ヶ所だった開催地も20ヶ所以上で開催された時期もあり、延べ入場者数が2万人を越えたことも

表1 しまね映画祭と映画塾の推移

年	しまね映画祭					しまね映画塾			
	回数	テーマ	開催市町数	上映作品数	入場者数	回数	開催地	作品数	塾生数
1992	第1回	環境	8	24	14,148				
1993	第2回	環境・アジア	9	48	19,966				
1994	第3回	愛・環境	13	64	24,309				
1995	第4回	平和・環境	14	74	21,011				
1996	第5回	環境・共生	18	56	20,907				
1997	第6回	環境・家族	18	52	23,852				
1998	第7回	環境+開催地ごとにサブテーマ	22	53	22,618				
1999	第8回	環境	23	57	24,386				
2000	第9回	環境	23	72	17,358				
2001	第10回	環境	20	51	14,199				
2002	第11回	環境	19	47	18,571				
2003	第12回	環境	19	48	11,961	第1回	頓原町	10	20
2004	第13回	環境	19	55	12,858	第2回	平田市	11	45
2005	第14回	環境	13	52	10,000	第3回	木次町	12	88
2006	第15回	環境	12	45	8,528	第4回	安来市	13	97
2007	第16回	環境	15	46	8,618	第5回	出雲市大社町	12	97
2008	第17回	環境	12	39	9,670	第6回	松江市美保関町	12	92
2009	第18回	環境	10	41	8,598	第7回	大田市	9	75
2010	第19回	環境	10	36	8,989	第8回	津和野町	9	65
2011	第20回	環境	10	35	5,417	第9回	安来市	10	90
2012	第21回	環境・生命(いのち)	8	34	7,395	第10回	大田市三瓶町	12	95
2013	第22回	環境	10	36	5,923	第11回	益田市	10	73
2014	第23回	環境	10	36	6,004	第12回	松江市宍道町	8	75
2015	第24回	環境	9	36	6,036	第13回	邑南町	9	88
2016	第25回	環境	11	32	7,179	第14回	雲南市	10	79

出所) しまね文化振興財団

ある。この映画祭が継続的に実現している背景には、各開催場所のスタッフの存在が大きい。

2.3 「しまね映画塾」の概要

「しまね映画祭」の活動の延長線上に誕生したのが、「しまね映画塾」(以降「映画塾」)である。主催は「しまね映画祭実行委員会」で塾長は錦織監督である。映画を見るだけでなく制作を体験することで、より映画の魅力に触れてもらうとのことから、映画制作の経験など一切ない、一般の人たちが参加して映画を制作するワークショップ型の「映画塾」が始まった。

「映画塾」は、6月にガイダンスが開催され、同時期にシナリオを募集して10本前後の作品が選考される。8月にキャスティングがあり、9月の撮影は2泊3日の合宿形式で行われる。年齢も性別も職種も価値観も違う他人同士が1



撮影現場を見守る錦織監督（撮影 木佐方徳）

つのチームとなり撮影が始まる。プロの映画監督、評論家、カメラマンが、撮影現場を視察して直接アドバイスをしたり、一日の終わりにコメントをしたりする。撮影終了後は、プロの編集者の支援

のもと編集作業に入り、11月に作品の上映会が開かれ、専門家から講評を受ける。

初めての「映画塾」は2003年に頓原町で開催された。最初の参加者は20人程度であった。以来、毎年、県内各地を撮影の舞台として行われているが、筆者のひとりである木佐は、この話を最初に聞いた時に、本当に素人だけで作品ができるのか少し懐疑的であった。なぜなら、普段、テレビ番組やCMなどを制作する仕事をしているため、映像制作の難しさを分かっているからだ。一番驚いたのは、「映画塾」は「なんにも教えない」ことから始まっていることであった。基本的な機械操作等は教えるが、それ以外は塾生が自ら考えて行動しなければならない。もちろん撮影がうまくいかないようであれば、専門家が手を差し伸べることはあるが、あくまでも補助的な支援である。

しかし、第2回目の2004年に木佐が初めて「映画塾」の撮影合宿を見た時、この懐疑心は吹き飛んだ。全く撮影経験のない監督、今までカメラを持ったことのないカメラマン。現場で助監督になった人に「助監督とは何をすればよいのか」と聞かれたこともあった。「私は何もできなかったけど、周りのみんなが支えてくれたから1本の作品が撮れました」と言いながら撮影を終えて泣きじゃくる女性監督。心打たれる光景もあった。どの作品も生き生きとした映像で綴られ、中にはプロ顔負けの作品もあった。荒削りで直球の手作りの映画のなかに何か伝えたいメッセージが込められているのである。それは“奇跡”ともいえる。錦織監督は、「自然の中、地域の人の優しさに包まれて撮影された



撮影合宿に集まった塾生たち 一さくらおろち湖の尾原ダム前にてー（撮影 木佐方徳）

作品の中に透けて見える本物の日本。それは、その先にある日本のあり方を示唆しているかのように思えます」と評価している。そして、その“奇跡”は毎年、起こっているのである。

3. 「しまね映画塾」関係者間で起こる“奇跡”

3.1 「しまね映画塾」2016 in 雲南

2016年度の「映画塾」は、島根県雲南市で開催された。雲南市は、「生命と神話が息づく新しい日本のふるさとづくり」を理念に掲げ、①笑顔あふれる地域の絆、②世代がふれあう家族の暮らし、③美しい農山村の風景、④多彩な歴史遺産、⑤新鮮で安全な食と農、という5つの恵みを軸にまちづくりに取り組んでいる。2010年の国勢調査では、人口が41,917人で、年少人口割合は12.2%、高齢化率は32.9%であった。人口減少、少子高齢化の「課題先進地」から「課題解決先進地」への転換を図っている。

雲南市は、錦織監督の2010年の「うん、何？」という映画と2017年に公開される「たたら侍」という映画のロケ地である。速水雄一市長は、「文化は生活そのもの。普段の暮らしに内在するため、いわゆる経済的な活動も含まれている。この文化の熟度が高まっていき土壌ができてくると芸術が花咲くのである」

という^[8]。「うん、何？」と「たたら侍」という映画を生み出し、「映画塾」が開催された雲南市には熟度の高い文化を育む土壌をもった「地域の力」がある。

2016年は、6月19日にガイダンス（シナリオ講座と撮影体験）が開催され、6月10日～7月10日まで塾生とシナリオの募集が行われた。8月上旬にはシナリオ選考が行われ、全国からの応募作品56作品から10作品が選ばれた。8月21日には、スタッフの顔合わせ、およびキャストオーディションがあり、オーディションでは、キャストのセリフ読み・アピールを聞き、各チームがシナリオに合う配役を決定した。

そして、9月17日から19日に撮影合宿は行われた。塾生は79名で（男女比7：3）、鳥根県だけでなく、鳥取県、岡山県、広島県、山口県、福岡県、東京や大阪方面等から参加した。最年少は7歳で最年長は86歳であった。割合の高い世代を表すと、10歳代15%、20歳代22%、30歳代15%、40歳代25%、50歳代19%であった。出演者や地元ボランティアスタッフを加えると総勢約200名になる。塾生たちは10チームに分かれる。1チームにすると平均8人。各チームの塾生は監督や助監督、カメラ、音声、役者やサポートスタッフなどを担当し、それぞれが5～8分程度の短編映画を撮影する。予算は2万円のみである。

合宿終了後の10月には、第36回日本アカデミー賞最優秀編集賞を受賞した日下部元孝氏を講師に迎え、塾生と一緒に編集作業を行った。11月23日には、作品発表上映会にて、10作品とメイキング映像が大スクリーンで上映された。各作品が、錦織監督や映画評論家の北川れい子氏、「たたら侍」に出演している小林直己氏、編集技師の日下部元孝氏や地元の審査員等から講評を受けた。

2016年の雲南市で開催された「映画塾」のひとつのチームでの出来事を紹介しよう。審査員賞を受賞した平井剛史監督の「ラストレター」という作品である。この作品は、高校3年生の酒蔵の娘が、酒蔵を継ぐか、大学の医学部へ進学するかを迷っていた時、18歳の誕生日に、亡母からのビデオメッセージをみて、母の決意に生きる意味を知り、自身の進路を決める、という物語である。

このチームは、監督、助監督、カメラマン、録音、キャスト5名の合計9名で編成された。2日目までは、互いの探り合いが続いていた。転機が訪れたのは、2日目の撮影終了後のバーベキューを食べながらの懇親会の時であった。助監督の隈本佐波さん（20歳代前半、福岡大学3年の女子学生）が平井監

督（40歳代）に、最後のシーンで気になることを伝えるか否かを迷っていた。隈本助監督は、今回が初めての参加であり、目上の人に本音で話すことに躊躇をしていたが、「明日は最終日、納得しなかったら後悔することになるのではないか」と仲間に背中を押されたこともあり、勇気を出して平井監督に意見をぶつけた。その内容は「主人公の心の揺れがわかりづらい。主人公が何をどう決心したのかわかりづらい」というものであった。

平井監督は、この撮影のために8月からずっと準備をしてきた。スタッフとも事前にメールやラインを活用して連絡を取り合ってきた。練りに練り上げた段取りで進めてきた最後のシーンを、最終日直前で20歳代前半の隈本助監督にバサッと切られてしまったのである。

平井監督は、「正直に言ってくれてありがとう」と答えたが、それからがたいへんであった。どのように修正するのか、ということで議論が始まった。懇親会は討論会になり夜は更けていった。討論に夢中になり、バーベキューの地元産の美味しいお肉は真っ黒焦げになるほどであった。懇親会終了後、平井監督は、脚本を2か所修正し、午前1時頃に隈本助監督にメールで送信するとすぐに「確認しました。それだけでもイケると思います。演技指導が重要になってくると思います。明日は頑張りましょう！」という回答があった。平井監督は、最終日の撮影を前に午前3時ぐらまで眠れなかったようだ。

平井監督は、普段は、有名企業の管理職であるが、撮影の時は、年齢も肩書も関係なくなる。ひとつの作品をつくりあげることに向かって、みんなが殻を破って発言し能動的に動き始める。撮影終了後の全体反省会の時に、隈本助監督は、「引っ込み思案だったのですが、このチームに入って殻を破ることができました」と涙声で発言した。これに対し、平井監督は「僕が彼女の殻を破ったわけではありません。僕は彼女にただ助けていただいていただけです」とつぶやいた。

3日間の合宿終了後、平井監督に花束を渡した隈本助監督の涙は止まらなかった。平井監督の目頭も熱くなっていた。平井監督はこの時のことを以下のように振り返っている。

隈本助監督が撮影最後に流した涙を、僕は美しいと思います。自己満足に近いかもしれませんが、少なくとも僕らのチームで作った作品が、僕らの



撮影を終え喜びを分かち合う塾生たち（撮影 木佐方徳）

心の何かに触れ、気持ちがり涙となり溢れさせたのだと思います。そんな、胸から溢れ出るような涙を、僕は随分長い間忘れていました。感動すれば涙するってことを思い出したのです。この映画も、

このチームも誇らしく思っています。

この「ラストレター」という作品は、同年11月23日の作品上映会にて、審査員賞を受賞することとなる^[9]。

このような“奇跡”は、開催期間中のみには留まらない。隈本助監督は「もしかしたらあの出来事が私の人生の転機ではないだろうかというぐらい私は大きく変わりました。積極的になりました。いろんなご縁に恵まれて、自分がどう生きていくかを前向きに考えるようになりました」と言っている。「映画塾」終了後も近況報告をし合って関係性が続いたり、リピーターとして参加したりという展開もある。さらに、塾生同士で結婚して島根県に定住した事例や、塾生同士で新しくお店を開いて島根県の地域振興に貢献している事例などもある。

3.2 「しまね映画塾」で起こる“奇跡”の背景

では、なぜこうした“奇跡”が起こるのだろうか。ここでは“奇跡”という表現を用いているが、これは必然でもある。「映画塾」は、“奇跡”を起こしたい人々が主体的に参加してくる場である。日常の自分を変えたい、何か突破したい、何か壁を打ち破りたい、自分を表現したい、新しい自分を発見したい、など動機はさまざまである。もちろん、面白そうだから参加してみた、誘われたから参加してみた、という塾生もいる。参加動機はさまざまであっても、時間とお金をかけて参加していることは間違いない。そこには、「地域の力」と

「映像の力」というふたつの大きな力が働いている。

まず、「地域の力」とは何か。開催地である地域に、“奇跡”を期待している地域の人たちがいることとそれが実現できる土壤があることである。錦織監督はこの「映画塾」が続いているのは島根の地域の自然、歴史、文化の豊かさに基づく地域の人々の包容力によるものであるという。

ある例を紹介しよう。塾生たちが撮影している農家を錦織監督が訪れた時である。そこには塾生たちはいたが、家主はいない。家主は家を空け放ち、田んぼへ稲刈りに行ったというのだ。錦織監督はこんなことは都会ではありえないと驚嘆した。見知らぬ人たちに家を自由に使わせる地域の包容力。しかし、これは裏を返せば、若い人たちががんばってほしい、自分たちの暮らす地域を舞台にすばらしい作品を作ってほしいというエールなのだ。塾生たちは、そのような、地域の人たちの愛情ともいえる、大きな包容力によって、毎年、心を打つ作品を作りあげることができるのである。さらに、作品を見た地域の人々は、自分たちの地域の良さに改めて気づいたり、地域への誇りを強めたりすることもあり、学ぶ姿勢を忘れない。ここに“共育”の文化が看取できる。

前節で紹介した、涙を流した女性監督が言った「みんなが支えてくれたから」という言葉は、チームの塾生たちだけでなく、地域のお世話になった方々への感謝の念も込められている。島根県の県民性に、ボランティア参加者が多く、加えて犯罪発生率は低く、犯罪検挙率が高いという特色がある。こうした温かい人間関係や地域社会が島根県には残っていることは上述したが、これらの地域の特徴が「映画塾」で実証されているともいえる。

次に、「映像の力」である。映像は誰が見ても分かりやすい結果であるため、創作意欲が沸き、誰もがもっとがんばろうとチームが一丸となる。また、スタッフの人数は限られており、誰か1人抜けても作品の完成はままならない。作品の完成という目標の中で個人の優劣など関係なく、お互いを認め合う関係性ができてくるのである。錦織監督は、ガイダンスにおいて「わからせようとするより、感じてもらうような映画」を作って欲しいと述べている。技術的なことよりも、何か伝えたいものがある。それを伝えるために、チームとして何ができるかを考慮したうえで、限られた時間と予算で撮影しなければならない。映像は、言葉だけではなく、言葉だけでは落ちてしまう他の何かも伝える

ことができる。だからこそ力を抜くことができない。そして、できあがった映像作品を見た時、チームの絆はさらに強まるのである。

このように“奇跡”を信じる人が集まった場で「映像の力」と「地域の力」が交差する時に“奇跡”が起こるのではないだろうか。“奇跡”とは何か、それは、参加する前と参加した後では、違う自分になっていることである。もちろん、“奇跡”など期待しないで、何となく参加したという塾生もいる。しかし、参加した後は、何かが違っていることには気づく。この塾は、島根県のある地域を舞台に地域住民と参加者が一体となって映画制作を通して互いが育みあう“共有”的な場となっており、参加者の当該地域への関心の高まりや地元愛の醸成が行われるなどの効果もみられている。

4. 「しまね映画塾」の応用可能性

4.1 「しまね映画塾」を経験した福岡大学の学生たち

ここで、視線を福岡に転じてみよう。錦織監督は、福岡大学経済学部の非常勤講師でもある。経済学部では、産業界で貴重な経験を持つ講師を招いて、自身の経験等を語ってもらうオムニバス形式の講義科目がいくつかある。錦織監督が福岡大学で最初の講義を行ったのは、2006年6月の「情報社会と経済A」であった。2007年からは「ベンチャー起業論」という科目で、錦織監督は毎年1回講義を担当している^[10]。

2005年に福岡大学経済学部に入學したY君は、2年生の時、授業を通して錦織監督と出逢い、特別な存在となる。その後、錦織監督の熱い想いが投影された作品をいかに伝えていくかを考慮して授業で紹介したり、八女市で錦織監督が制作した映画の上映会を開いたりした。Y君が全く興味のなかった映像に興味を持ち始めたのである。大学4年次において「映画塾」に参加しようとしたY君であったが、単位取得がうまくいかず卒業が危うくなり落ち込んで自暴自棄になっていたため、直前になって辞退しようとした。この時に、錦織監督が、「とにかく来い。何も迷うな」とY君に声をかけた。それだけでなく、実行委員会の担当者は、「単位は日頃の成果なのだから、2～3日の間、福岡にいないからといってどうにかなるわけではないでしょ。来れば必ず何かを得ることができるから」と助言をしたという。Y君は、4年間で卒業できないという恥

ずかしさでいっぱいであったが、録音役として参加した。

その時の参加を通して「映画塾」では新鮮な自分に出会える居心地の良さを感じ、「映画ってこうやって生まれるんだ」と体感したという。その後、「映像をつくるのが好きだ。誰かを感動させたり、何かつくったりする仕事に就きたい」という思いが強くなり、その後は、必死で勉強に励み半年遅れで卒業し、映像に関連する会社に就職をした。就職後も、2010年にはメイキング班として、2011年にはキャストとして「映画塾」に参加している。2016年には、先述した「ラストレター」のカメラマンとして参加した。この時は、「映像のプロの世界に入ったがゆえに、ものを表現するという“原点”に戻りたいとの思いで戻ってきた」とのことであった。Y君は、「島根県は、ありふれた日常と違った非日常の風土が存在しており、歴史・神話と人々の生活に繋がりに一種の“聖域”のような力がある土地だ」と述べている。彼にとって島根県は第二の故郷になっており、錦織監督を師匠と慕っている。

さらに、2013年に入学したA君は、2014年と2015年にキャストとして「映画塾」に参加した。A君は福岡の都市部出身であるため、島根で開催されることの意義を含めて以下のように述べている（柳・辰巳2016）。

私は、地方で撮影することに意味があると思います。この3日間で得たことは数多くありました。特に普段都会ではできない体験ができたことや、地元の方々に優しくしてもらったことです。周りに視界を遮るものがなく、雲海や星の美しさに感動しました。自然と触れ合うことで日常の疲れを癒してもらい、心が晴れ晴れとしました。また、地域の方々に美味しい料理を振舞っていただいたり、声をかけてもらったりするなど優しいお気遣いが印象に残りました。おかげさまで生きていることが有難いものだと感じました。

確かに私の住む都会とは生活が全く違います。でも、安心した日常生活を送ることは変わりありません。便利さや快適さではなく、皆が安心して生活できること、笑顔で居られることが有難いものではないでしょうか。3日間の「映画塾」の撮影合宿に参加してみて、こうやって人と接することができること、笑って楽しい生活が送れることは、とても有難く幸せなことだと改めて感じました。このような体験をさせてくれた島根のよさを、私は外部の

一員として、他者に伝えていきたいと思います。

4.2 福岡大学の「しまね映画塾」の応用の試み

福岡大学の学生を含め「映画塾」に参加した人々が変わっていく様子を間近にみてきた福岡大学の教員がいた。経済学部の阿比留正弘教授と西原宏教授である^[11]。そして、「映画塾」のようなものを経済学部の授業として導入し、映像を制作することを通して互いが育みあう“共有”的な学びの場を創出できないかという議論が始まった。基本的なアイデアは、ワークショップ形式の少人数授業で、いくつかのチームに分かれて映像作品を制作するというものである。「映画塾」と異なる点は、フィクションの映画づくりではなく、ノンフィクションのドキュメンタリー映像づくりということである。この講義を2016年度に担当したのが、「映画塾」の第2回目からテクニカルサポートや番組の撮影等でかかわっている筆者のひとりである木佐（映像制作会社 TSK エンタープライズ）である。前期に「ベンチャーワークショップA」（企画からチーム分け、撮影、作品の構成）を開講し、8月第1週に集中講義「ベンチャーワークショップB」（編集と発表会）を開講した。約20人の学生を4チームに分け、それぞれが以下のテーマでドキュメンタリー映像作品を制作した。

① 「子育ての今」（5分）

（若い子育て世代の抱える悩みを探ると共にその解決法を考える）

② 「糸島の魅力を伝えるカフェ」（4分45秒）

（福岡県糸島市の魅力をカフェオーナーたちの視点から描く）

③ 「海を越えた友情～飯塚の留学生を繋ぐネットワーク」（6分55秒）

（福岡県飯塚市で活動している留学生支援団体の活動を紹介）

④ 「770年続く博多織の継承と進化」（8分20秒）

（福岡の伝統工芸品である博多織の歴史と未来に向けて挑戦する姿）

この講義をするにあたって一番に重要視したキーワードは「何も教えない」という言葉である。これは「映画塾」のテーマでもある。互いに成長し合うという“共有”の中から生まれた言葉だ。「何も教えない」という状況は学生たちが自らで主体的に考え、行動しなければならないという状況を生み出す。

そのため、1回目の講義では映像を言葉だけで相手に伝えるというゲームや

身の回りで起きた出来事を1分のニュースにまとめるゲームなどを行った。まずは学生たちにスクール形式のイスに座ったままの授業だという意識を取り除いてもらおうという意図だ。この導入により学生たちは映像にも興味を持ち、学生同士の距離も一気に縮まった様子であった。

問題だったのは次の段階であった。次の段階は、テーマを決め、撮影をするために、撮影対象者へのアポイントをとらなければならない。しかし、学生たちは初対面の社会人と話すという機会も少なく、講義の趣旨を伝えたり、撮影の交渉をしたりすることがうまくできなかったのだ。こうして撮影は進まず、制作作業は暗礁に乗り上げてしまった。

しかし、この失敗は、学生たちを成長させる大きなチャンスでもあった。学生たちは、この時のことを「自分はこう言いたいということがあっても、伝えることが難しかった」「きつい、しんどいと思ったが、できなかったら恥ずかしいと思った」と振り返っている。失敗をした学生には、ヒントを与え、少しサポートしながら自らで問題を解決してもらう。この成功体験によって、学生たちはさらなる困難に立ち向かう力が生まれるはずである。この取り組み方は、特にアクティブラーニング学習法を参考にした。こうした失敗と成功を繰り返すイメージで講義は進んでいき、8月の集中講義では何とかであるが、4チームすべての映像作品が完成した。

完成したものは、小さい頃からスマートフォンなどで映像に慣れている世代であって、最終的には学生ならではの着眼点で形式に捕らわれない純粋な作品であった。それらは、テクニックに走らず、作為がない作品、飾り気がなくストレートに表現する力強い作品であった。ドキュメンタリーであるため「映画塾」とは異なるが、荒削りで直球の手作り作品という点では共通している。

授業の最後に、受講した学生たちにアンケートをとったところ、以下の回答があった。その中で最も多かったのは「映像制作のやり方がわかった」「テレビがどのように作られているのかわかった」という感想であった。2番目に多かったのは「チームで取り組んだので楽しかった」「チームの一員としてがんばれた」という「チーム」というキーワードを含んだ感想であった。映像制作において、チームになるというのはあたり前のことであるため、この回答は意外であった。同時に今の若者はチーム一丸となって1つの目標に向かうという

経験が少ないのではないかという課題がみえてきた。

また、チーム内の連携だけでなく、チーム間の啓発も含まれている。

「取材に行けない人は編集でがんばるなどそれぞれが役割を担っていた」

「意見がぶつかった時には落としどころを定めて制作を進めた」

「他チームが頑張っているんだから自分たちも頑張らなくてはと思った」

さらに、映像制作を通して得られた「力」は何かとの問いには、「足を運ぶ力」「会話力」「下根性力」「心の力」「学生力」という回答があった。現場に行つてインタビューをする際の観察の仕方・聞き出し方、取材する側の心のあり方が試されていたことがわかる。「チーム内での駆け引きや地域の方々への配慮など心の動きがあり、その心がにじみ出ている作品ができた」というコメントもあった^[12]。

「何も教えない」が基本にあるものの、現場の人々、チームの仲間、教員など、必ず「他者」がかかわっている。「他者」が試行錯誤の学生たちにはほどよい距離感で手を差し伸べるという環境も生まれている。このワークショップの講師であった木佐は、学生たちはチームで団結する機会や社会人とかかわる機会が少ないことを痛感すると同時に、目的を設定し後方からさりげなく支援すれば目的は達成できると確信した。木佐は、教育現場で働く機会は少ないが、今回のワークショップを担当することで、映像制作を通して主体性を引き出すアプローチに関する学びや、若者たちの現状とこの現状を打破するための糸口を発見することができた。

それだけではない。木佐は、8月の作品発表会では、学生たちよりも、一番自分が緊張していたと感じた。それは、阿比留教授と西原教授という作品を見る観客、つまり、さらなる「他者」が存在したからである。木佐はベテランの40歳代で映像制作会社の映像企画部部長であり、自身の制作した番組が放送され不特定多数の人々に見られることには慣れていて、しかし、自身の講義で学生が制作した作品を公開する時には極度の緊張感に襲われたのである。2016年の「映画塾」の「ラストレター」の平井監督（40歳代）が「胸から溢れ出るような涙を、僕は随分長い間忘れていました」と述べていたように、木佐も同様、若者たちを通して長い間忘れていた感覚を思い出したのである。講師自身も変わっていく、この過程こそが、共に育み合う“共育”であったといえよう。

5. おわりに ― 地域社会の“共育”力再考 ―

山登(2016)は、番組と個人制作によるビデオ作品との違いのひとつとして「他者」の存在をあげている。ワンパーソンワークで作るビデオ作品は、他者が不在であるため、独断に陥りやすく、自己満足や自己弁護で覆われた脇の甘い作品になりがちであるが、スタッフワークの番組制作は異なる。スタッフワークでは、カメラマン、音声担当、音響効果担当、編集担当、ナレーター、リサーチャー、ドライバーなどの役を担う人々のチーム力が必要となる。人数が少なければ兼務をしなければならない。そういうチームで制作した映像は、上映会において、全体を見渡す立場であるプロデューサー的な存在が観客の代表という役割(他者性)をはたしてチェックされる。

この「他者」の存在が、映像制作において重要なのである。この点については、「映画塾」では、専門家が制作過程に後方支援としてかかわりながら最後の上映会で講評されること、作品が鳥根県内で放送されることなどから、ただ内輪の自己満足な映像ではなく、「他者」を想定した映像、つまり、誰かへ伝えたいメッセージをもつ映像となっている。「他者」とは、顔のみえる他者でもあるし、不特定多数のこともある。杉谷委員長が映画を「自分を映す鏡」とっていたように、映像に熱いメッセージが込められていれば、顔のみえない他者がどこかで何かを感じてくれるかもしれない。「奇跡」が起きる要素のひとつである「映像の力」の背景には「他者」の存在があったのである。

福岡大学での映像制作ワークショップにおいても、学生たちが試行錯誤ではあったが彼ら自身でテーマを絞り込んで企画し、取材して、作品をつくりあげて上映したことで、学生が自ずと「他者」の存在を意識し始めていた。講師も学生という「他者」を通し変わっていった。ただし、このワークショップでは、大学3年生と4年生の同年代のチームであること、地域社会へのアプローチ期間が短いことなどから、「地域の力」の影響力は小さい。時間をかけて地域社会との関係性の構築を行う必要があるという課題が明確になったが、同時に、「地域の力」を大学の講義に取り入れることの難しさも示している。

「映画塾」の場合、塾生を受け入れる地域は、映画祭の開催から映像に対する理解が高いことと、映画祭からの長期的な取組の延長線上に塾生を受け入れる協力体制ができており、地域社会に若者たちを含めた外部者を受け入れる包

容量が備わっている。受け入れた後は、映画塾のスタッフだけでなく、地域の人々がそれぞれの役割を果たし、動的にかかわって共に学び成長する“共育”の場を創出している。映像制作という名のもとに「他者」との濃厚な出逢いが生まれており、それは「僕らは何もしていなくて、場所を提供しているだけ」という錦織監督の言葉に象徴されている。地域社会に、一方的に場を提供しているという考えではなく、何かを得よう、自身も変わっていこうという共に学び共に育み合う“共育”力がない限り、「映像の力」が加わっても、いわゆる“奇跡”は生まれない。雲南市長が述べていたように、地域に暮らしの文化という土壌ができていない限り、何を植えても花は咲かないのである。

「何も教えない」ことから始める共育アプローチは、トップダウンで知識伝達のみで傾斜した教育に疑念を持った教育思想家であるフレイレ（1979）の「意識化」の概念を引用して表すことができる。「意識化」とは、「学習によって自らと他者、あるいは現実世界との関係性を認識し意味化する力を獲得しながら、自らと他者あるいは現実世界との関係を変革し人間化しようとする自己解放と同時に相互解放の実践」である。

「他者」の存在は、若者たちにとって、現実世界との関係性を認識し意味化する力を養う。「映画塾」や福岡大学のワークショップにおいて、若者たちが、映画制作のチームの一員として何らかの役割を果たし、かけがえのない存在であることを認識したことは上述したとおりである。さらに、「しまね映画塾」での若者たちの一部は、他者にも影響を与えていくことによって自己が解放されていく過程をたどった。この二段階の「意識化」を経験すると、チーム以外の別の社会関係においても、解放された自己が主体的に他者とかわかって、“共育”という関係性が構築されていくのである。

このような個々人の社会関係を地域社会に当てはめてみることも可能である。「限界集落」というレッテルを貼られた地域社会が、都会の人々や若者たちという新しい「他者」と出逢うことで、自分たちの地域の文化を客観視することができる。ただし、表面的な出逢いや交流だけでは不十分である。ある地域を舞台に映画制作というチームで取り組み、各々が本気でぶつかりあう活動、そして、その映像を通して何かのメッセージを「他者」に発するという活動が、“共育”へとつながっているのである。

地域外からの参加者にとっては、その地域が忘れられない場所として記憶に刻まれ、そこでの社会関係がかけがえのないものとなるのである。定住することは稀だが、その地域を忘れることはない。Y君が「第二の故郷」と指摘し、自身の原点を見つめ直す場が島根県だといって何度も足を運ぶという行為が、地域の人々のアイデンティティをさらに強くする。地域の人々にとっては、あの作品があの人忘れられない存在として記憶に刻まれ、かけがえのない出来事として認識されるのである。

そういう意味では、「地域の力」が発揮できる“共育”の場は、大学の無機質なコンクリートの建物の中で創出することは容易ではない。なぜなら、暮らしの文化という土壌がある地域社会においてはじめて花は咲くからである。どのような花を咲かせるのか、どんな“奇跡”を起こすのか。今なら間に合う。地域社会の存続が危ぶまれているなか、地域に宿る“共育”力を再考する必要があるのではないだろうか。

謝 辞

本稿執筆においては、映画監督の錦織良成氏、護縁株式会社の安川唯史氏、しまね映画祭実行委員会の企画委員長の杉谷宥男氏、島根県民会館の館長の西尾俊也氏、景山知恵子氏、「ラストレター」の監督の平井剛史氏、助監督の隈本佐波氏、カメラマンの山諸秀樹氏（株式会社ナックイメージテクノロジー）、雲南市長の速水雄一氏、産業振興部商工観光課課長の落合正成氏、福岡大学経済学部教授の阿比留正弘氏、4年生の青才福人氏および、「ベンチャーワークショップ」を受講した学生のみなさんから多大なる協力を得ました。なかでも、福岡大学経済学部教授の西原宏氏からは、本稿の構想段階から聞き取り調査、執筆まで貴重なご助言をいただきました。紙面の制約があり全ての方のお名前をあげることができませんが、多くの方々からご支援を受けました。ここに記して深謝の意を表します。なお、本報告は、JSPS 科研費（26301028）の研究成果の一部であります。

【参考文献】

小宮山宏、2007、『課題先進国日本』中央公論新社。

- 高橋幸市・村田ひろ子、2011、「社会への関心が低い人々の特徴」『放送研究と調査』8月号、pp.26-47。
- 辰已佳寿子、2016、「地域社会に受け継がれる人々の『生』」『七隈の杜』12号、pp.55-62。
- 田村学、2015、『授業を磨く』東洋館出版社。
- 徳野貞雄、2010、「ツーリズムは功罪を超えるか」『水の文化』35号、pp.10-13。
- 中根千枝、1967、『タテ社会の人間関係』講談社。
- 長山靖生、2015、『若者はなぜ「決めつける」のか』筑摩書房。
- 日本村落研究学会編、2005、『消費される農村』農山漁村文化協会。
- フレイレ、パウロ、1979、『被抑圧者の教育学』（小沢有作訳）亜紀書房。
- 長谷正人、2016、『映像文化の社会学』有斐閣。
- 広井良典、2009、『コミュニティを問い直す』筑摩書房。
- 増田寛也編、2014、『地方消滅 東京一極集中が招く人口急減』中央公論新社。
- 松野良一・塚本恵美子・真島貞幸・五嶋正治・村田雅之、2013、『映像制作で人間力を育てる－メディアリテラシーをこえて－』田研出版。
- 山登義明、2016、『ドキュメンタリーを作る 2.0－スマホ時代の映像制作』京都大学学術出版会。
- 柳永珍・辰已佳寿子、2016、『釜山大学・福岡大学学術交流会 報告書』。

【注】

- [1] <http://www.chiikiokoshitai.jp/>
- [2] http://www.pref.shimane.lg.jp/admin/region/kikan/chusankan/chiiki/tool_box/kokoroe.data/H26chiiki.pdf
- [3] http://www.pref.shimane.lg.jp/admin/region/kikan/chusankan/chiiki/index.data/nanakajyo_chk.pdf
- [4] 『豊かな社会をどうやってつくるか』（2010）（<http://www.pref.shimane.lg.jp/admin/pref/koho/tijisitu/yutakananihon.data/allzenbun.pdf>）
- [5] 朝日新聞「世界に誇る“日本”を発信 島根編」（2017年1月27日付）
- [6] 「山陰元気印」でのインタビューを引用（<http://genki.sanin-navi.jp/3583.html>）。
- [7] 「松江テルサ」は、2000年に開館した松江駅前の松江勤労者総合福祉センターの愛称。映画祭やコンサート、展覧会、セミナーや発表会、スポーツ活動等の文化活動を通して人々が交流する都市型複合施設。
- [8] 2016年11月23日のしまね映画祭クロージングイベントで行ったインタビューより。
- [9] これまでの作品は「しまね映画塾」（<http://www.cul-shimane.jp/eigasai/eigajuku/>）のホームページで閲覧可能。
- [10] いずれの講義も、コーディネーターは、福岡大学経済学部の阿比留正弘先生である。
- [11] 阿比留先生は2007年からオブザーバーとして参加。西原先生は2013年からオブザーバーとして参加。筆者のひとりである辰已は、2013年、2014年に塾生（助監督）として参加し、2016年はオブザーバーとして参加した。
- [12] 授業終了から少し期間をおいた2016年11月7日、西原先生に協力してもらい、①と②の映像を制作した学生5名に対して辰已がインタビューを行った。